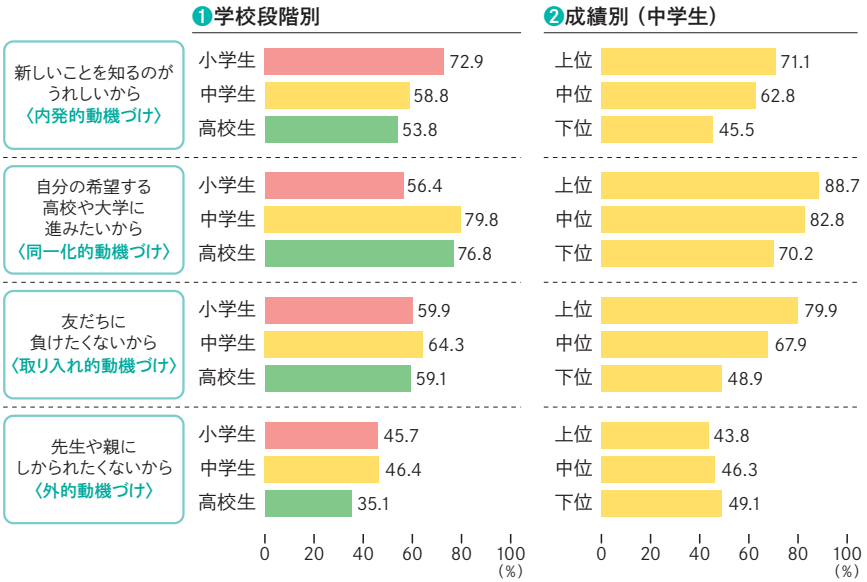
データで教育を読む
Benesse Report
第8回

学習成果につながる動機づけや勉強方法とは？

今回取り上げるのは、小・中・高生の学習動機づけや勉強方法に関するデータです。同じ子どもを2016～17年の2年間にわたり追跡調査した結果から見えてきた、学習成果を上げるための動機づけや勉強方法についてご紹介します。

1 学校段階ごとに動機づけや勉強方法が変化

図1 学習動機づけ（勉強する理由）



注1）「とてもあてはまる」＋「まあてはまる」の％。
注2）2016年の結果。「小学生」は小4～6生の数値。（図2も同様）
注3）成績は子どもの自己評価。国語・数学・理科・社会・英語の5教科について各5段階で回答してもらったものを合計した上で、人数で上・中・下に3等分した。（図2～4も同様）

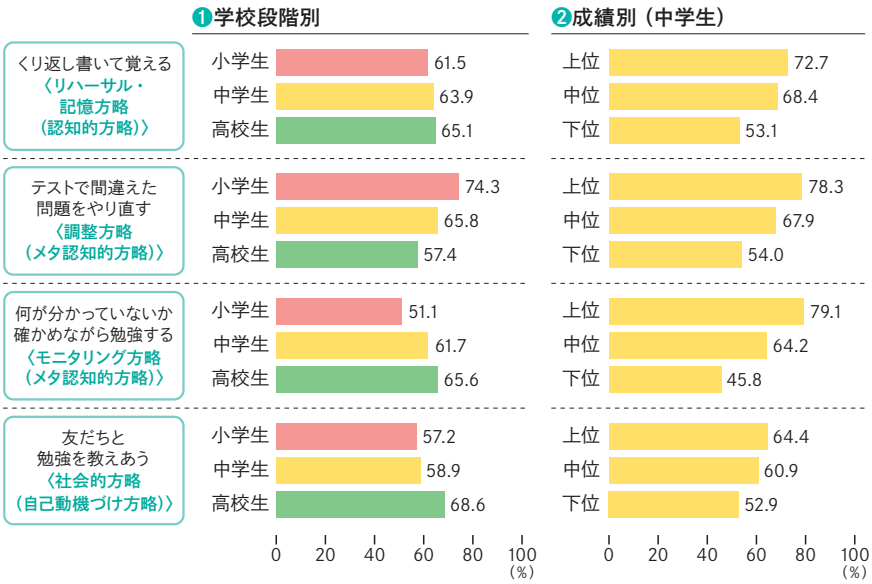
学校段階が上がると内発的動機づけは低下

子どもが主体的に学習を進め、学習成果につなげるには、「学習動機づけ（学習意欲）」「学習方略（勉強方法）」「メタ認知」が重要とされる*。

まず、調査項目「勉強する理由」より子どもの学習動機づけを学校段階別に見ると（図1❶）、小学生は「新しいことを知るのがうれしいから」という内発的動機づけを持つ比率が高い（7割強）。一方、中・高生になるとその比率が下がり（5割台）、「自分の希望する高校や大学に進みたいから」という将来に向けた動機づけを持つ比率が上がる（8割弱）。動機づけは学校段階によって変化することが分かる。

調査対象の中間の学校段階である中学生に絞って成績別の結果を見ると（図1❷）、成績上位の子どもほど、前記2つや取り入れ的動機づけの比率が高い（中・下位と約5～30ポイント差）。

図2 活用している勉強方法（学習方略）



注）「よくする」＋「ときどきする」の％。

中学生は成績上位ほど多様な勉強方法を活用

次に、子どもの勉強方法を学校段階別に見ると（図2❶）、「くり返し書いて覚える」方法は、小・中・高生とも6割強が使っている。しかし、ほかの勉強方法の活用頻度は、学校段階ごとに異なり、「テストで間違えた問題をやり直す」は小学生ほど使っており（7割台）、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」「友だちと勉強を教えあう」は学校段階が上がるほど割合が上がる（6割台）。

これも、中学生に絞って成績別に見ると（図2❷）、4つの勉強方法とも成績上位の子どもほど活用頻度が高く（下位と約10～30ポイント差）、成績上位の子どもは多様な勉強方法を用いていることが分かる。

＊ 教育心理学研究の「自己調整学習」理論による「主体的な学び」の3要素。「メタ認知」とは自分の状況を客観視すること。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2016-2017」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる第2回調査（2016 年実施）と第3回調査（2017 年実施）。2015 年から毎年、小学1年生から高校3年生までの親子約2万組に調査し、子どもの成長のプロセスや成長に必要な環境・働きかけを明らかにしている。2019 年7月に第5回調査を実施予定。

◎詳細は下記ウェブサイト（プロジェクトの進行状況）をご覧ください。
https://berd.benesse.jp/special/childedu/

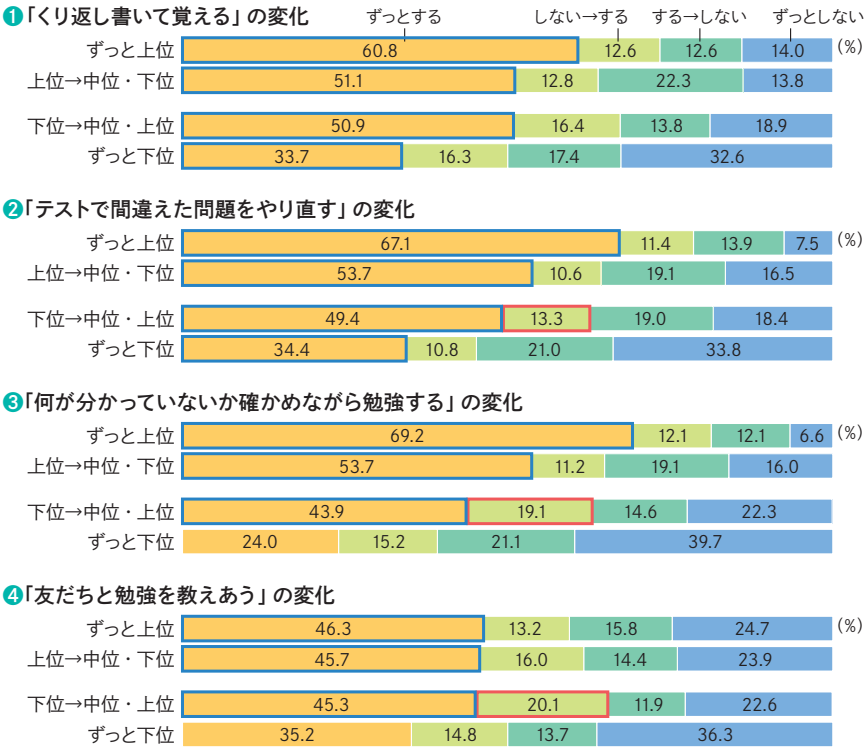
データ解説

ベネッセ教育総合研究所
主任研究員
橋本尚美
はしもと・なおみ

初等中等教育領域の子ども、保護者、教員を対象にした意識や実態の調査研究を担当。子どもの文化世界や学びの実態、子どもの成長環境としての社会・学校などに関心を持っている。

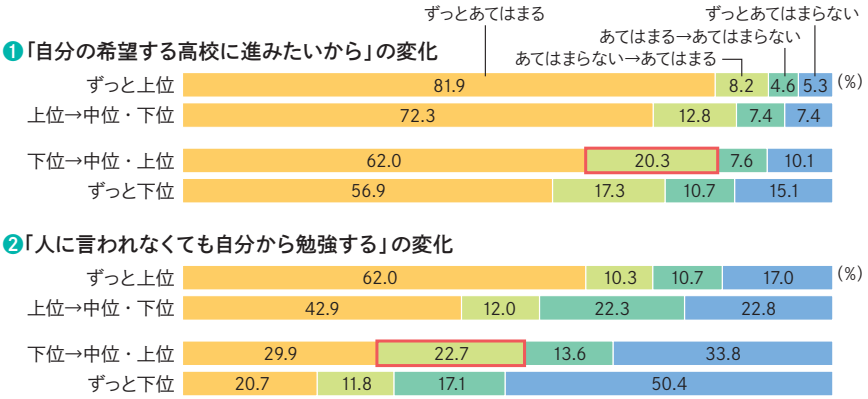
2 勉強方法等の工夫が学習成果につながる

図3 活用している勉強方法の変化（成績の変化別）



注1）2016 ～ 17 年の結果。（図4も同様）
注2）成績は、中1・2→中2・3の1年間の変化。「ずっと中位」などは省略した。
注3）勉強方法は、「よくする」「ときどきする」と回答した子どもを「する」、「あまりしない」「まったくしない」と回答した子どもを「しない」として、中1・2→中2・3の1年間の変化を見たもの。

図4 学習動機づけ（勉強する理由）や勉強の自主性の変化（成績の変化別）



注）「とてもあてはまる」「まあてはまる」と回答した子どもを「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」として、中1・2→中2・3の1年間の変化を見たもの。

学習を客観視し、友だちと一緒に学習を

次に、動機づけや勉強方法が変化する段階にある中学生に焦点をあて、成績と勉強方法の変化の関連について解説する。

図3は、1年間（2016～17年）の成績の変化別に、4つの勉強方法の変化の割合を示している。一部の項目を除いて、勉強方法を継続する（「ずっとする」）割合が高く（青枠）、子どもは1年間で勉強方法をあまり変更していない。特に、成績が「ずっと上位」の子どもは❶～❸の勉強方法の継続割合が高く、この3つは成績上位の維持に有効だと思われる。

次いで、成績が「下位→中位・上位」に上昇した子どもを、「ずっと下位」の子どもと比較すると、上昇した子どもは、❷～❹の勉強方法で「しない→する」の比率が高い傾向だ（赤枠）。特に❸・❹では約2割を占めており、❸のように自分の学習を客観視（メタ認知）しながら学習を効果的に進める方法や、❹の友だちと一緒に学習する方法は成績上昇に効果がありそうだ。なお、成績は「ずっと下位」でも❸・❹を「ずっとする」割合が2～3割台だが、この子どもたちは正しい方法を実行できていない可能性がある。

自主的な学習行動も成績と関連あり

さらに、**図4**を見ると、成績が上昇した子どもは、ほかの子どもに比べて、「自分の希望する高校に進みたいから」という動機づけを持つようになった比率や、「人に言われなくても自分から勉強する」ようになった比率が高い（赤枠、2割強）。

日ごろの学習を成果につなげるには、前述の勉強方法を効果的に活用すること（学習方略）、自分の学習を客観視（メタ認知）することと合わせて、それを自ら進める自主性も必要だろう。